

# 「貧困」の日・愛蘭比較文学 ——小林多喜二と Eilis Dillon をめぐって\*

河 村 民 部

## 第一部

### 序

人類が生きている限り、「愛」あるいは「生と死」がそうであるように、「貧困」というのは永遠のテーマである。如何なる時代に於ても、如何なる国に於ても、人は「愛」あるいは「生と死」がそうであるように、この「貧困」から逃れることはできなかつたし、今もそうである。「貧困」というテーマは、「愛」あるいは「生と死」がそうであるように、それほどまでに普遍的で、容易に解決策を提供しうるものではない。だが何時の時代にも、またどの世界に於ても、「貧困」による苦悩とそれからの脱却のための苦闘が演じられてきた。「貧困」からの脱却のこの戦いは、如何なる終焉あるいは解決を見るのであろうか。

フランス・パリ経済学校の経済学者トマ・ピケティ教授 (Thomas Piketty, 1971～) が、『21世紀の資本論』(*Capital in the Twenty-First Century*) という新マルクス資本論を出版し、その英訳が昨年なされて、アメリカなどでは大変な人気になっており、最近ではNHKの討論番組でこの本が取り上げられるまでになった。その本の中にはイギリスの小説家ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) やフランスの小説家バルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850) の小説が取り上げられ論じられている。たとえば、『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811) 『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*, 1813)、あるいは『ゴリオ爺さん』(*Le Père Goriot*, 1835) などの名作で、作品の冒頭に描かれる登場人物の属する社会的階級と収入が、その物語のその後の構造を決定するということが述べられている。

ピケティ教授の例に倣って、筆者はオースティンの最も有名な小説『高慢と偏

見』(*Pride and Prejudice*, 1813) の場合を取り上げてみよう。この小説の有名な冒頭の一句 “It is a truth universally acknowledged that a single man in possession of a good fortune must be in want of a wife.” が物語の構造全体を決定している。つまり、「富を持っている男は妻を欲しがっているに違いないというのはあまねく知れ渡っている真実である」というのであるが、主人公の一人ミスター・ダーシー (Mr. Darcy) は大邸宅を持つ貴族の大地主の富豪として位置づけられると、その妻選びのための舞踏会が田舎で催され、これに名乗りを上げようとする娘が出てくるというわけである。この小説では、それがしがない牧師の娘エリザベス (Elizabeth) というわけで、中流階級の娘が大富豪の貴族の地主の嫁に釣り合うわけがないということも、「あまねく知れ渡っている真実」であるから、ミスター・ダーシーとエリザベスが結びつくようになるには、大変な紆余曲折があるわけで、二人してそれぞれの「高慢」と「偏見」を捨てなければ、事は成就しない。そして小説は必然的にその「高慢」と「偏見」の除去をめぐって展開されるという構造が決定されることになる。

要するに、ピケティ教授は、富のある者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなるというのが、オースティンの生きた時代と同じく、現代の社会的経済構造であり、しかもこれは世襲的である点を強調している。確かに日本でもここ数年前から「ワーキング・プア」という言葉が流行しており、多くの労働者が啄木の「はたらけど はたらけど猶 わが生活<sup>くらし</sup>楽にならざり ぢつと手を見る」(『一握の砂』)の一句を身に染みて感じてきているのではないだろうか。そのような社会的現象は、筆者のような年金暮らしの、「ワーキング・プア」ならざる、「ペンション・プア」にも及んでいる。

ピケティ教授が言うように、現代はまさに 18 世紀や 19 世紀に逆戻りしようとしているのであれば、その当時のことを振り返って考えてみるのも、一考に値するであろう。ピケティ教授は、その本の中で、如何にすればこの貧富の格差が解消されるのかについて、その一つの解決策として、富める者に相応の税を課して、貧しい者を潤すという、いわば社会主義原理に基づく解決策を提唱している。但し、本論はピケティ教授の目的とするような格差是正や社会改革のための経済学的論議をしようというのではない。ましてや、「貧困」というテーマに関する普遍的な哲学論

議を提供しようというものでもない。

本論では、以下に見るように、日本では小林多喜二（1903/明36-1933/昭8）の小説を、そしてイギリスではアイリス・ディロン（Eilis Dillon, 1920-94）の小説を取り上げ、〈富める者＝支配者〉と〈貧しい者＝被支配者〉という現在も継承されているように見える社会構造が、過去に於て、如何に「貧困」を醸し出し、如何に両者の間の衝突と社会的混乱と個人的苦悩を生じさせてきたか、そしてそれが如何に文学作品に描き出されているかを比較文学論的に論じることのみ関心がある。とはいえ、本論は些かも人間的関心を欠くものではない。

小林多喜二では、主として未定稿『防雪林』（1928）とその完成稿『不在地主』（1929）そして名作『蟹工船』（1929）が小説の舞台とする北海道とそこでの地主と小作人、あるいは資本家と労働者の確執を取り上げる。先ほど比較の観点からイギリス文学の貧困を扱った作品を取り上げると言ったが、正確にはイギリス文学ではなくてアイルランド文学で、作者のアイリス・ディロンは、1916年のイースター・ライジング宣言署名者の一人で蜂起後に処刑されたジョウゼフ・プランケット（Joseph Plunkett）の姪にあたる女流作家である。小説は『波頭を越えて』（*Across the Bitter Sea*, 1973）という題名で、いわゆる「飢えの40年代」（“hungry forties”）と文学史に言う1840年代から20世紀初頭まで続くアイルランドの「飢餓」と「貧困」を背景に、地主と小作人の確執を扱ったものである。

多喜二の小説の舞台北海道が日本の「内植民地」と言われたのに対し、アイルランドもまた20世紀初頭までイギリスの「内植民地」に等しい存在であり、北海道同様に支配者により貧困を強要された、まさに「ワーキング・プア」の典型であった。このように両作家の作品はともに「内植民地」を舞台とした植民地支配とそれからの「独立」と「自由」の獲得の軌跡を描いている点で、共通性があり、興味深い比較の対象になる。最近アメリカの多喜二研究家のノーマ・フィールド氏が『小林多喜二——21世紀にどう読むか』（岩波新書、2009）の中で、「貧困の反対は富ではなく、正義である」という解放の神学者レオナルド・ボフの言葉を引用し、「時空を超えて、解放の神学の思想は多喜二とその運動の精神と見事に響き合う」（56）と述べているが、それはまさにディロンの小説世界を要約しうるキー・ワードということが出来るし、さらには「時空を超えて」現代の「ワーキング・プア」

と呼ばれる者の心を打たずにはおかないであろう。

では多喜二の『防雪林』『不在地主』および『蟹工船』のあらましを述べ、それにその他の多喜二の主要な小説から、必要に応じて引用を取り、それとの対比でディロンの『波頭を越えて』のあらましを述べ、必要に応じた引用を取り、両作家が如何に「貧困」のテーマを扱っているかを比較文学的論に検討する。以下、紙数の関係で本論を第一部と第二部に分け、第一部では小林多喜二を、第二部ではアイリス・ディロンをそれぞれ扱う。

## 本論（第一部）

### 小林多喜二『防雪林』『不在地主』その他の小説

『防雪林』では、青年源吉は母と妹お文と、幼い弟の由<sup>よし</sup>を一人で養っている。この一家は今は亡き父親が内地で食い詰めた一家を新天地北海道の石狩原野に入植することで生きる道を開こうとしてやってきたが、こうした入植者に明治政府が推奨したような夢の実現とは程遠いのが現実であることがわかり、小作人はいつまでも自分の開墾した土地を持たず、作った作物の大半は地主に年貢として召し上げられ、おまけに生活を維持するために銀行から借りた金利に苦しめられるという、貧困のどん底生活を余儀なくされる。

父親は死に、幼い時に父に連れられてやってきた源吉が今や一家を支える大黒柱となっている。だが、父親の残した一家の貧困生活は、源吉が農業のみならず、農閑期には山の仕事や土方に出て稼いでも、一向に改善されることはない。石狩川の鮭でさえ、これを取ると密漁として警察に監視されている。長雨が続いて不作であっても、地主は小作人の生死にはお構いなしに、年貢米の割合を増やすという暴挙にでる。石狩川沿いにポツンポツンと点在するだけの茅葺の土壁の崩れた小屋に暮らす農民は、やむなく地主に直訴すべく集会を開き、代表を決めて、勇ましく地主の住む市（小樽）に向けて、荷馬車に収穫した米俵をありったけ積んで、これを金に変えて凍る冬を凌ぐべくやってくるが、組織的な団結の仕方も交渉術も知らない村人たちは、町に入るとたちまち警官に捕えられ、豚箱に放り込まれ、したたか暴力を振るわれて、おまけにコメもすべて没収され、意気消沈して村に帰ってくる。

源吉もこの地主への年貢削減の嘆願陳情の一行に勇んで参加したが、他の者同様に散々打ちのめされ、怒りと屈辱を胸に村に帰ってくる。ただ源吉の場合、他の村の青年と違って、本能的な怒りを抑えることができない生まれもつての野性を特徴とする青年である。この野性が、ある時は禁制の秋鮭の密漁に彼を駆り立てたことがあるが、今度はしたたかに官憲や地主に打ちのめされて、抑えきれずに頭をもたげ、積年の恨みを晴らすべく、源吉は誰にも内緒で、町に住む地主の豪邸に赴き、これに放火することになる。

この小説では、作者多喜二の創作意図は源吉の野性的存在と農民の暮らしの二つを描くことにあった。源吉の野性が、秋鮭の密漁の場面や最後の放火の場面に遺憾なく発揮されているが、この頃が多喜二はまだ社会主義思想の体系的把握には至っていなかったようで、争議行為の組織的な遂行の仕方なども、ただ村人の本能的な怒りに任せのみで、未熟なものとなっている。社会主義思想の体系的認識が遺憾なく発揮されて、地主に対する争議行為が見事に成功するのが、同じテーマを継承発展させた次作『不在地主』である。だが、『不在地主』は未定稿『防雪林』が持っているような、本能に生きる源吉の野性、荒れ狂う自然と一体となって活動する野性の迫力には欠ける。組織化された争議運動の成功を描くというのが、『不在地主』の目的であったからであるが、ここにプロレタリア文学の特徴と同時にその限界を見ることもできよう。

だが、荒れ狂う自然と一体となった人間の野性の活動のすさまじさは、『不在地主』で潰え去ったのではなく、名作『蟹工船』や『<sup>ひがしくっちゃんこう</sup>東倶知安行』に於て、その威力を発揮している。日本に於けるこうした面での自然描写は、他の作家の追随を許さない多喜二の優れた力量として高く評価されねばならないだろう。荒々しい自然とそれに呼応した人間の野性を描くという点では、多喜二の他に、岩野泡鳴や有島武郎もいる。源吉のような野性的存在の先蹤としては、有島武郎の「カインの末裔」や、泡鳴の北海道放浪を描いた小説『毒薬を飲む女』などにも注意を払う必要があろう。

未定稿『防雪林』の内容によく似ているが、『防雪林』の力点が主人公源吉の野性的人物創造に置かれていて、小作争議の方が不完全な展開を見せるのに反して、『不在地主』は力点が主人公の健の野性的魅力にはなく、むしろ貧民の代表的人物の一人として小作争議の組織化・系統化に置かれているのが特徴的である。この小説では

主人公健は、『防雪林』の源吉とは違い、秋鮭の密猟をすることもなく、また地主の屋敷に火をつけて炎上させることもない。その代り、未定稿での小作争議の展開の不備を改め、地主や権力者の横暴阻止のために農民のみならず、町の貧しく搾取されている労働者と協調して同盟を組み、さらに市民一般にも自分たちの置かれている不当な地位と身分を訴える広報活動も行うなどして、共感を勝ち得、権力者や資本家がこれを鎮圧できなくなるまでに至って、小作争議の勝利に到る過程を描くことに力点が置かれている。この小説では実際にあった磯野小作争議がモデルとして用いられており、この時には労農組合が合体して地主磯野の横暴に立ち向かい、組織的勝利を収めた。

ただし、内地で食い詰めた健の父親が母と共に幼かった自分を連れて故郷を離れ、開拓した田畑は自分のものになるという政府の甘言によって石狩の原野に入植し、気がついて見ると自分の畑ではなくて、それは地主のものとなり、自分たちは小作人として、何時まで経っても飢えと貧困からは抜け出せない地獄のような歳月を送ることを余儀なくされているという状況は、『防雪林』と同じである。

『不在地主』では、秋田の故郷を捨てて、北海道に移住する健の父の姿——それは多喜二の父の姿であったであろう——と、地主岸野の管理人吉本に具現された権力者、および権力者と結びついた坊主の実態の一例を具体的に見ておこう。

夜逃げする健の父の姿はこのように描かれている——

「早く暮れてければええ…」——独り言のように言った。父だった。

暗くなってから、荷物を背負って外へ出た。峠を越える時、振りかえると、村の灯がすぐ足の下に見えた。健は半分睡り、父に引きずられながら、歩いた。暗い、暗い、深い谷底に風が渡るらしく、それが物凄く地獄のように鳴っていた。——健はそれを小さい時にきいた恐ろしいお伽噺のように、今でもハッキリ思い出せる。

「誰とも道で会わねばええな。」——父は同じことを十歩も歩かないうちに何度も繰り返した。

五十近い父親の懐には「移民案内」が入っていた。(『防雪林・不在地主』岩波文庫、168)

なぜ一家はこのようにして「夜逃げ」をしなければならなかったかについては、『転形期の人々』の次の文が参考になる。

夜逃げをやったのは、父も母も一言も話さないでヨクは分らなかったが、その誤魔化し（小作米の目方を誤魔化したこと）を「納日」に皆の前で、こびっどくばらされたこと、小作料を滞らしているの、幾らでも人の代りがあるのだから出て行ってくれと云われたのが原因だった。——村の同じ小作たちは、然し龍吉の一家がそうなくても、みんな知らない振りをした。（『転形期の人々』『定本小林多喜二全集』第七巻、新日本出版社、1976、25）

同じく『不在地主』では、地主岸野の管理人吉本の実態はこのように描写されている——

吉本管理人は、いくら（不作の）田を見せて頼んでも、決してそのまま岸野に知らせてやってはくれなかった。裏では、吉本を本名で呼ぶものはいない。「蛇吉蛇吉」（じゃきち）と云っている。管理人だから黙っているけれど、誰かに不幸があったとき、地主が小作人に送って寄こす「香奠」から頭を割った。自分ですっかり書き直して、それから小作のところへ香奠を持ってきた。道路や灌漑溝の修繕工事をするに云って、日雇賃を地主から出さして置いて、小作人を無償で働かし、それをマンマと自分のものにしてしまった。小作料の更新をするぞ、とおどかして、「坪刈り」にやってくる。しかし本当は嘘で、自分の家に何百羽と飼ってある鶯鳥や七面鳥のエサにするための口実でしかなかった。（『防雪林・不在地主』岩波文庫、244）

同じく『不在地主』での次の描写は、権力と結びついた坊主の説教の実例である

毎年の例で、小樽から「偉い坊さん」を呼んで、S村龍徳寺で、四、五日間説教がひらかれた。——龍徳寺の前には、岸野や吉岡などの大地主や、△、吉本など

の寄付金の「芳名録」の札がズラリと立っている。岸野は「金壺千円也」出していた。——小樽から坊さんと呼ぶのも、主に岸野のつてだった・・・

「現世は苦しい——厭なこと、悲しいこと、涙のにじむようなこと、淋しいこととって満ち満ちている。だが、これも前世イからの約束事、何事も因果の致すところじゃ、そう思ッ——て、しのばにゃならない。——お釈迦様はそうおっしゃっていなさる。」

坊さんはそう云う。年寄達は一句切れ、一句切れごとに、「南無阿弥陀仏」を繰り返かえた。

「・・・その代り、あみだ様のお側にお出になったとき、始めて極楽往生を遂げることが出来る。あ——あ、お前も人間界にいたときは苦しんだ。然し何事も仏様の道を守って、一口も不平を云うことなく、よくこらえて来た、もう大丈夫じゃ、さ、手を合わせて、こういう風に合わせて、たった一言、ナミアミダブツ、そう称えさえすれば大安心を得ることが出来るのじゃ。蓮華の花の上に坐ることが出来るようになるのじゃ・・・」(同、275-76)

こうした農民が行き場を失い、命をかけて出稼ぎに行くのが、名作『蟹工船』の漁夫や雑夫となる。農民だけではない、町では工場と同じく機械に追い回されて命からがら逃れてきた労働者も、また暗闇の地の底に投げ込まれて毎日地獄の苦しみを味わってきた炭鉱夫も、漁夫や雑夫になってオホーツクの荒海に蟹漁に出掛けていく。彼らは、従って、もうそれ以外に生きる選択の余地のない切羽詰まった者たちの集まりなのである。その彼らを虫けら同然に扱い、酷使するのが蟹工船の監督であり、それも日本男児の名誉にかけてロシア人に負けないように働けと、大義名分を掲げられるが、その実、これらの労働者は、権力者と資本家が甘い汁を吸うための陥穽に投げ込まれた存在にすぎない。そのために権力者と資本家は、国を動かし、軍隊を動かして労働者を搾取する。これに気付いた労働者が、本能的に立ち上がり抵抗し、一度目は失敗するが、失敗の辛酸を教訓に二度目には反逆に成功する。蟹工船という船は「近代日本における北海道の歴史的意味を凝縮していた」(同、148)とノーマ・フィールド氏は言う。

こうした貧民の吹き溜まり的状况、権力者と地主・資本家による貧民搾取の実情



が、『蟹工船』のある一節に集約されているので、そのところを少し長いが引用しておく——

北海道では、字義通り、どの鉄道の枕木もそれはそのまま一本一本労働者の青むくれた「死骸」だった。築港の埋立には、脚気の土工が生きのまま「人柱」のように埋められた。——北海道の、そういう労働者を「タコ（蛸）」といっている。蛸は自分が生きて行くためには、自分の手足をも食ってしまう。これこそ、全くそっくりではないか！そこでは誰をも憚らない「原始的」な搾取が出来た。「儲け」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかえってきた。しかも、そして、その事を巧みに「国家的」富源の開発ということに結びつけて、マンマと合理化していた。抜け目がなかった。「国家」のために、労働者は「腹が減り」「タタキ殺されて」行った。

「其<sup>あこ</sup>処から生きて帰れたなんて、神助け事だよ。有難かったな！んでも、この船で殺されてしまったら、同じだよ。——何アーンでえ！」そして突調子なく大きく笑った。その漁夫は笑ってしまってから、しかし眉のあたりをアリアリと暗くして、横を向いた。

鉾<sup>やま</sup>山でも同じだった。——新しい山に坑道を掘る。そこにどんな瓦斯が出るか、どんな飛んでもない変化が起るか、それを調べあげて確信をつかむのに、資本家は「モルモット」より安く買える「労働者」を、乃木軍神がやったと同じ方法で、入り代り、立ち代り雑作なく使い捨てた。鼻紙より無雑作に！「マグロ」の刺身のような労働者の肉片が、坑道の壁を幾重にも幾重にも丈夫にして行った。都会から離れていることを好都合にして、ここでもやはり「ゾツ」とすることが行われていた。トロッコで運んでくる石炭の中に拇指や小指がバラバラに、ねばって交ってることがある。女や子供はそんな事にはしかし眉を動かしてはならなかった。そう「慣らされていた。」彼らは無表情に、それを次の持場まで押してゆく。——その石炭が巨大な機械を、資本家の「利潤」のために動かした。

どの坑夫も、長く監獄に入れられた人のように、艶のない黄色くむくんだ、終始ボンヤリした顔をしていた。日光の不足と、炭塵と、有害ガスを含んだ空気と、温度と気圧の異常とで、眼に見えて身体がおかしくなってゆく。「七、八年も坑夫をしていれば、凡そ四、五年間ぐらいは打っ続けに真暗闇の底にいて、一度だって太

陽を拝まなかったことになる、四、五年も！」——だが、どんな事であろうと、代りの労働者を何時でも沢山仕入れることの出来る資本家には、そんなことはどうでもいい事であった。冬が来ると、「矢張り」労働者はその坑山に流れ込んで行った。

それから「入地百姓」——北海道には「移民百姓」がいる。「北海道開拓」「人口食糧問題解決、移民奨励」、日本少年式な「移民成金」などウマイ事ばかり並べた活動写真を使って、田畑を奪われそうになっている内地の貧農を煽動して、移民を奨励して置きながら、四、五寸も掘り返せば、下が粘土ばかりの土地に放り出される。豊饒な土地には、もう立札が立っている。雪の中に埋められて、馬鈴薯も食えずに、一家は次の春には餓死することがあった。それは「事実」何度もあった。雪が溶けた頃になって、一里も離れている「隣の人」がやってきて、始めてそれが分った。口の中から、半分のみかけている藁屑が出てきたりした。

稀に餓死から逃れ得ても、その荒ぶ地を十年もかかって耕やし、ようやくこれで普通の畑になったと思える頃、それは実にちアんと、「外の人」のものになるようになっていた。資本家は——金利貸、銀行、華族、大金持は、嘘のような金を貸して置けば、(投げ捨てて置けば) 荒地は、肥えた黒猫の毛並みのように豊饒な土地になって、間違いなく、自分のものになってきた。そんな事を真似て、濡手をきめこむ、眼の鋭い人間も、また北海道に入り込んできた。——百姓は、あっちからも、こっちからも自分のものを嘔みとられて行った。そして<sup>しま</sup>終いには、彼らが内地でそうされたと同じように「小作人」にされてしまっていた。そうやって百姓は始めて気付いた。

——「失敗<sup>しま</sup>った！」

彼らは少しでも金を作って、故里の村に帰ろう、そう思って、津軽海峡を渡って、雪の深い北海道へやってきたのだった。——蟹工船にはそういう、自分の土地を「他人」に追い立てられて来たものが沢山いた。

積取人夫は蟹工船の漁夫と似ていた。監視付きの小樽の下宿屋にゴロゴロしていると、樺太や北海道の奥地へ船で引きずられて行く。足を「一寸」すべらすと、ゴンゴンゴンゴンとうなりながら、地響きをたてて転落してくる角材の下になって、南部センベイよりも薄くされた。ガラガラとウインチで船に積まれて行く、水で皮

がペロペロになっている材木に、拍子食って、一なぐりされると、頭をつぶれた人間は、蚤の子よりも軽く、海の中へたたき込まれた。

——内地では、何時までも、黙って「殺されていない」労働者が一かたまりに固って、資本家へ反抗している。しかし「殖民地」の労働者は、そういう事情から完全に「遮断」されていた。（『蟹工船・一九二八・三・一五』岩波文庫、65-69）

これが明治維新以降、官軍に支配されて、それまで食<sup>は</sup>んでいた稜を召し上げられ、城を追われた藩の武士たちや、地代を払えずに困窮した農民たちが、政府の甘言に乗せられて新天地を求めて北海道に入植したなれの果てであり、こうした飢えと困窮は長い間続いた。

多喜二には、こうした地主と小作人の争議、あるいは搾取者と被搾取者の対立を扱った『不在地主』や『蟹工船』のほかに、1928年2月20日、日本初の第一回普通選挙で北海道第一区労農党候補者の共産党員山本懸蔵（小説では島田正策）のための厳しい遊説を扱った『東倶知安行』（ノーマ・フィールド氏はこれを「ひとりの人間が社会変革を目指す運動に身を捧げる『旅』であり、死と再生を描く通過儀礼の崇高なドラマ」（128）と呼んで絶賛している）や、この選挙結果を受けて始まった徹底的弾圧として労働運動家の全国一斉検挙による拷問を扱った「拷問文学」の世界的傑作と言われる『一九二八・三・一五』、さらには、職場の中に運動のメンバー（細胞）を組織し、「産業資本家」および彼らをさらに支配する「金融資本家」に対抗する日本の左翼運動を描いた『工場細胞』などがある。

まず、多喜二が大吹雪を冒して、マツカリヌプリの平原を馬轡で突っ切る選挙遊説の場面を『東倶知安行』から引用する。ここには自然の猛威と闘うことは、即ち「貧困」「権力」と闘うことの象徴であるとともに、その力強い筆致には多喜二の高貴な野性が遺憾なく発揮されている点に注目したい。

空が暗くなって、粉のような雪が地面と平行線に、矢のように鋭く吹き飛んできた。何時の間にか魔法でも使われたように、マツカリヌプリのあの大きな図体が、フッと吹いて、カキ消されたように見えなくなっていた。私達は風上に背を向けると、吹き飛ばされないように、むしろをしっかりと抑えた。然し、むしろの裾がバタ

バタとはためいて、遠慮なく雪が喰いこんで来た。

「山が鳴ってるよ。」駆者が風に逆って叫んでいる。

馬の鈴も風の工合で、ちっとも聞えなくなったり、と思うと、耳もとではっきり、リンリンと聞えたりした。——たゞ真白だ。その真白が沸えくっているように、狂い廻っているだけ！そして不思議な底気味の悪い「響き」が——「うなり」が、大荒れ時の物凄い海なりのように聞えていた。それがこの地面を揺ってでもいるようだった。私達の橇にさえ風が鋭くうち当って、ヒュウヒュウと悲鳴をあげて、折れてゆく。馬も、橇も、私達もたった一色に——真白になってしまった。私達の眉も、睫毛も一本々々、それに鈴本の関羽髭は勿論、皆真白い針のようになってしまい、頬や額は雪のために赤くほてって、まるっきり別な人相になった。（『東倶知安行』『定本小林多喜二全集』第三巻、新日本出版社、1981、186-87）

もう一つ、『東倶知安行』から、娘の身売りで組合運動に専心してきた七十の老人の姿に涙をのむ「私」多喜二の姿を映した一節を取り上げる——

窓を開けさえすれば、マツカリヌプリが魔物ように眼をさえぎって聳えているこの置き忘れられた——雪にうずもれている蝦夷の一寒村に、我々の運動が、こんなにも大きな真剣さで行われているのかと思うと、私はじっくりと眼に涙がにじみ出てくる感激を覚えた。（同、203）

さらには、ナップと呼ばれる「全日本無産者芸術団体協議会」の機関紙『戦旗』防衛のための巡回講演で、多喜二は1930.5.23大阪で逮捕され、はじめて拷問を体験し、以降東京に帰京して同年6.24に検束、「独房」に監禁、翌年31年1.22豊多摩刑務所を保釈されるも、翌1932年春には弾圧が広がり、やむなく地下生活に入る。そして運動の地下組織のリーダーとして活動した壮絶な日常生活を扱った小説『党生活者』が書かれることになる。

まず、『一九二八・三・一五』から早朝の検束の場面と取調べ拷問の場面描写を引用する。早朝の検束場面はこうである——

空気が空間を充しているそのままの形で、青白く凍えてしまっているようだった。何の音もしないし、人影もなかった。——夜が更けていた。ジリジリと寒気が骨まで透みこんでくる。午前三時だった。

カリカリに雪が凍っている道に、五、六人の足音が急にした。それは薄暗い小路からだった。静まりかえっている街に、その足音が案外高く響きかえった。電柱に裸の電灯がともっている少し広い道に、足音が出てきた。——顎紐をかけた警官だった。サアベルの音がしないように、片手でそれを握っていた。

ドカドカッと、靴のまま（！）警官が合同労働組合の二階に、一斉にかけ上がった！

組合員は一時間ほど前に寝たばかりだった。十五日は反動的なサアベル内閣打閣演説会を開くことに決めていた。その晩は、全員を動員して宣伝ビラを市内中に貼らせたり、館の交渉をしたり、それに常任委員会があったり——ようやく二時になって、ひとまず片付いたのだった。そこをやられた。（『蟹工船・一九二八・三・一五』岩波文庫、150-51）

次に、取調べ拷問の場面である——

渡は、だが、今度のものにはこたえた。それは畳屋の使う太い針を身体に刺す。一刺しされるたびに、彼は強烈な電気に触れたように、自分の身体が句読点ぐらいにギョッと瞬間縮まる、と思った。彼は吊されている身体をくねらし、くねらし、口をギュッとくいしばり、大声で叫んだ。

「殺せ、殺せ——え、殺せ——え！！」（211-22）

・・・・・・・・

工藤に対する拷問は大体渡に対するのと同じだった。ただ、彼がいきなり飛び上がったのは、彼を素足のまま立たして置いて、後ろから靴の爪先で力一杯かがとを蹴ることだった。それは頭の先までジーンときた。彼は取調室を、それをされて二回も三回もグルグル廻った。足首から下は播木のように、しびれてしまった。かがとから出た血が室の中に円を描いた。工藤は金切声をあげながら、瘦馬のように跳ね上った。彼は終にへなへなに寄り込んでしまった・・・

そのすぐ後で取調べられた鈴本の場合なども、同じ手だった。彼は或る意味でいえば、もっと危ない拷問をうけた。彼はなぐられも、蹴られもしなかったが、ただ八回も（八回も！）続け様に窒息させられた事だった。初めから終わりまで警察医が（！）彼の手首を握って、脈博をしらべていた。首を締められて気絶する。すぐ息をふき返させ、一分も時間を置かずにまた窒息させ、息を吹き返させ、また……。それを八回続けた。八回目には鈴本はすっかり酔払い切ったひとのように、フラ、フラになっていた。彼は自分の頭があるのか、無いのかしびれ切って分らなかった。ただ主任も特高も拷問係の巡査も、室も器具も、表現派のように解体したり、構成されて映った。そういう「もうろう」とした意識のまま、ちょうど大人に肩をフンヅかまれて、ゆすぶられる子供のように、取調べを進められた。鈴本は、これ危ないぞ、と思った。が、自分が一つ一つの取調べにどう答えているのか、自分で分らなかった。（同、211-15）

これらの暴力の場面へのコメントは不要であろう。実態はこのような非人道的で、残忍なものであった。

多喜二が「貧困」と「権力」に徹底して反逆したその根本要因は、恐らく秋田の故郷で地主に年貢を納めるために、「権力」に奉仕することで、「貧困」から逃れようとして、身体を悪くして、死んでいった父親の姿があったからではないかと思われる。『党生活者』には、父とは反対に「権力」に対する反逆者となった多喜二の姿が対照的に述べられた、簡潔ながら、注目すべき一節がある。

「私」（多喜二）と父との「貧困」・「権力」対処の相違——「反抗」と「奉仕」が描かれている——

だんだん私（地下に「潜ることになった」）には、交通費や飯にありつくために出掛けることさえ余裕なくなり、その喫茶店〔同棲女笠原を働かせている店〕には三日に一度、一週間に一度、十日に一度という風に数少なくなっていく。「地方」「地区」それに「工細」と仕事が重なって居り、一日に十二、三回の連絡さえあることがあった。そんな時は朝の九時頃出ると、夜の十時頃までかかった。下宿に帰ってくると首筋の肉が棒のように固<sup>こば</sup>わばり、頭がギン、ギン痛んだ。私はようや

く階段を上がり、そのまま畳のうえにうつ伏せになった。私はこの頃、どうしても仰向けにゆったりと寝ることが出来なくなった。極度の疲労から身体の何処かを悪くしているらしく、弱い子供のように直ぐうつ伏せになって寝ていた。私は思い出すが、父が秋田で百姓をしていた頃、田から上がってくると、泥まみれの草鞋わらじのまま、ヨクうつ伏せになって上がり端で昼寝していた。父は身体に無理をして働いていた。小作料があまり酷なために、村の人が誰も手をつけない石ころだらけの「野地やじ」を余分に耕やしていた。そこから少しでも作をあげて、暮しの足にしようとしたのである。そんなことのために父はひどく心臓を悪くしていた。——私はどうしてもうつ伏せにならないと眠れないとき、自分がだんだん父に似てくるように思われた。然し父は、地主に抗議して小作料を負けさせることをせずに、自分の身体をこわしてまで働くことでそれから逃れようとした。二十何年も前のことだが。然し私はちがう。私はたった一人の母とも交渉を絶ち、妹や弟からも行方不明となり、今では笠原との生活をも犠牲にしてしまった形である、それに加えてどうやら私は自分の身体さえそのために壊れかけているようだ——これらは然し私の父のように地主や資本家にモット奉公してやるためでなく、まさにその反対のためである！（『独房・党生活者』岩波文庫、163-64）

同じく『党生活者』から、「工場細胞」強化のために工場に潜入する運動員の姿と、特高に付け狙われている運動員の姿を描写した部分を引用する。まず工場内での運動員の姿の描写から——

私は八時までに、今日工場に起こったことを原稿にして、明日撒くビラに使うために間に合わせなければならなかった。それを八時に会うSに渡すことになっている。私は押し入れの中から色々な文書の入っているトランクを持ち出して、鍵を外した。——「倉田工業」は二百人ばかりの金属工場だったが、戦争が始まってから六百人も臨時工を募集した。私や須山や伊藤（女の同志）などはその時他人の履歴書を持って入り込んだのである。二百人の本工のところへ六百人も臨時工を取る位だから、どんなに仕事が殺到していたか分かる。倉田工業は戦争が始まってからは、今までの電線を作るのをやめて、毒瓦斯のマスクとパラシュートと飛行船の

側<sup>がわ</sup>を作り始めた。が最近その仕事が一段落をつげたので、六百人の臨時工のうち四百人ほどが首になるらしかった。それでこの頃の工場では、話がこのことで持ち切っていた。(同、56-57)

.....

伊藤は臨時工のなかに八、九人の仲間を作った。——倉田工業では六百人の臨時工の馘きるということが愈々確実に成り、十円の手当も出しそうにないことが（共産党のピラが撒かれてから）誰の眼にもハッキリしてきた。その不安が我々の方針と一致して、親睦会<sup>かたま</sup>めいた固りは考えたよりも容易く出来た。(同、114)

続いて特高に付け狙われている運動員の描写——

私達は自分のアジト付近での連絡でなかったら、九時半過ぎには一切の用事をしないことにしている。途中が危険だからである——私は須山とも別れ、独りになり帰ってくると、ヒゲ（捕まったと思われる同志）のことが自分でも意外な深さで胸に喰い込んでいることを知った。私は何だか歩くのに妙な心もとなさを覚えた。膝がゆるんで、息切れさえするようである。——普通の境遇で生活している人には、こういう時の私のこんな現象が幾分の誇張とウソを伴っているとみるかも知れない。然し外部からすべてを遮断され、個人的な長い間の友達とも全部交渉を絶ってしまい、一寸お湯へ行くのにもウツかり出ることが出来ず、且つ捕まったら少なくとも六年七年は行く身体では、頼りになるのは同志ばかりである。それは一人でも同志が奪われてみると、その間をつないでいた私達の気持の深く且つ根強かったことを感ずる。それがしかも私達を何時でも指導してきていた同志の場合、特にそうである。(同、64)

このような地下に潜る生活を余儀なくされた運動員が、ついに逮捕され、独房に入れられるとどのような扱いを受けるのか、その一端を『独房』から三つ引用しよう。

最初のものは人格の剝奪とモノへの転化の場面である——

（「青い禪」）それから、「仮調所」に連れて行かれて、裸にされた。チンポも何も



すっかり出して、横を向いたり、回れ右をしたり、身体中の特徴を記録にとられた。俺は自分でも知らなかった背中の中のホクロを探し出された。其処で、俺は「青い着物」を着せられたのだった。

青い着物を着、青い股引をはき、青い禪をしめ、青い帯をしめ、ワラ草履をはき、——生まれて始めて、俺は「編笠」をかぶった。だが、俺は禪まで青くなくなっていていいだろうと思った……

長い廊下の行手に、たくさんの鉄格子の窓を持った赤いレンガの建物がつつ立っていた。俺はだまって、その方へ歩き出した。(『独房・党生活者』、岩波文庫、18-20)

.....

次の引用は、独房での存在の記号化と孤独の実態に関する描写である——

(「アパート住い」)「南房」の階上。 独房——「No.19」 共犯番号「セ」の六十三号。

……俺は最初まだ何にも揃っていないガランドウの独房の中に入れられた。扉が小さな室に風を煽って閉まると、ガチャガチャと鋭い音をたてて錠が下り、——俺は生まれて始めて、たった独りにされたのだ。(『独房・党生活者』岩波文庫、18-21)

最後に、ミッシェル・フーコのいう「パノプチコン」(一望監視塔) 的監視下に置かれた囚人の描写である——

(「松葉の「K」「P」) 運動場は扇形に開いた九つのコンクリートの壁がつつ立っていて、八つの空間を作っている。その中に一人ずつ入って、走り廻る。——それを丁度扇の要に当る所に一段と高い台があって、其処に看守が陣取り、皆を一眼に見下している。(同、30)

以上が、多喜二の見聞した「搾取」と「貧困」、自ら体験した選挙遊説、機関紙

『戦旗』発行の廉での逮捕、拷問、独房監禁、弾圧化における地下活動そして最後の死に至る迄の姿の具体的描写である。これらはすべて第二部で論じるアイリス・ディロンの小説『波頭を越えて』に於て取り上げられる重要事項とパラレルをなすものであり、多喜二とディロンの小説を相互に照射することになる。

#### [付記]

\*本稿は2014年9月26日、大阪大学にて、橋本順光氏主宰の阪大比較文学会シンポジウム「環流の比較文学のために一日英の還流から多国間の環流へー」に於て発表した原稿に基づき、近畿大学文芸学部論文集『文学・芸術・文化』（第27-1）に投稿すべく稿を改めたものである。最初、多喜二とディロンのそれぞれの小説家からの引用は、後註の中で処理し、本文を簡潔にしたが、註の数がいささか多く、両作家の作品の具体的比較考量が混乱をきたすとの編集委員会の指摘を受けたため、註に掲げていた引用はすべて本文中に還元することにした。本文が長くなってしまったので、紙数の都合上やむなく第一部と第二部に分けることになった。比較を目的とする論文の性質上、一回で論じ切るのが相応しい所であるが、了解いただきたい。

## 参考文献

1. Thomas Piketty, Arthur Goldhammer trans. *Capital in the Twenty-First Century* (The Belknap Press of Harvard University Press, 2014)
2. ノーマ・フィールド『小林多喜二——21世紀にどう読むか』（岩波新書、2009）
3. Eilis Dillon, *Across the Bitter Sea* (New York: Simon and Schuster, 1973)
4. 小林多喜二『防雪林・不在地主』（岩波文庫）  
\_\_\_\_\_『蟹工船・一九二八・三・一五』（岩波文庫）  
\_\_\_\_\_『独房・党生活者』（岩波文庫）  
\_\_\_\_\_「東俱知安行」『定本小林多喜二全集』第三卷（新日本出版社、1981）  
\_\_\_\_\_『転形期の人々』『定本小林多喜二全集』第七卷（新日本出版社、1976）
5. 岩野泡鳴『泡鳴五部作（上）発展・毒薬を飲む女』（新潮文庫、復刻、平6）
6. 本庄陸男『石狩川』（新日本出版社、復刻初版、2011）
7. Elizabeth Gaskell, *Mary Barton* (1848, rptd. New York: Putnam's Sons, 1972)
8. Charlotte Brontë, *Shirley* (1849, rptd. J.M. Dent & Sons, 1968)
9. F.W. Robinson, *Owen: A Waif* (London: Hutchinson & Co., 1862)
10. F.H. Groome, *Kriegspiel: The War Game* (Ward, Lock & Bowden, 1896)